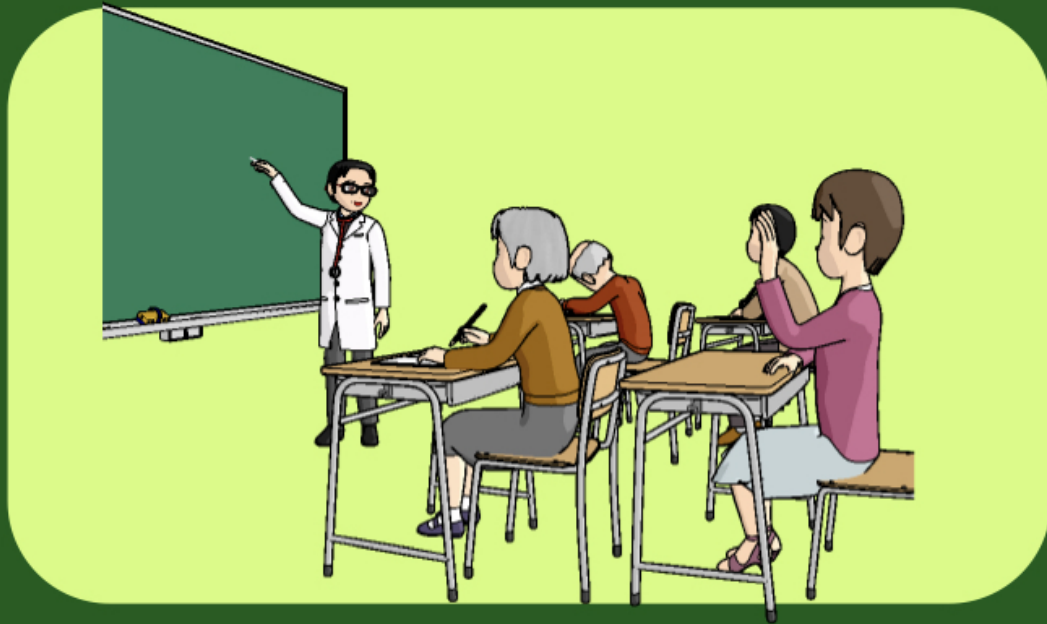


ピンピンコロリの基礎知識



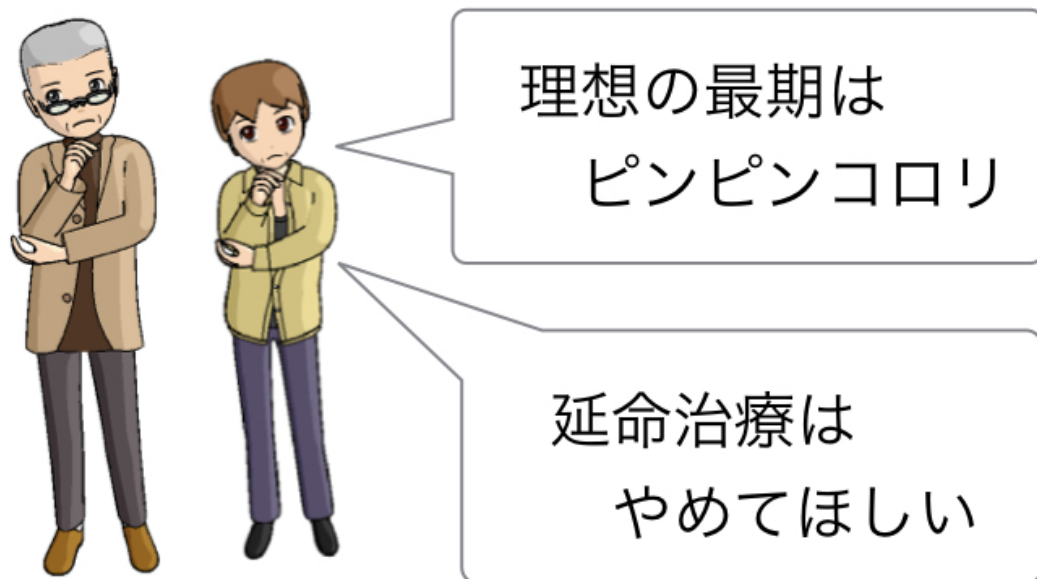
生きがい訪問診療所

院長 木暮 裕

1

高齢者がピンピンコロリを理想とするならば、治療選択のために知っておくべき基礎知識があります。それでは、授業開始です。

理想の最期はどんな最期？



理想の最期はどんな最期？と聞くと、多くの方が「ピンピンコロリがいいな」「延命治療は要らない」と言います。

ピンピンコロリとは・・

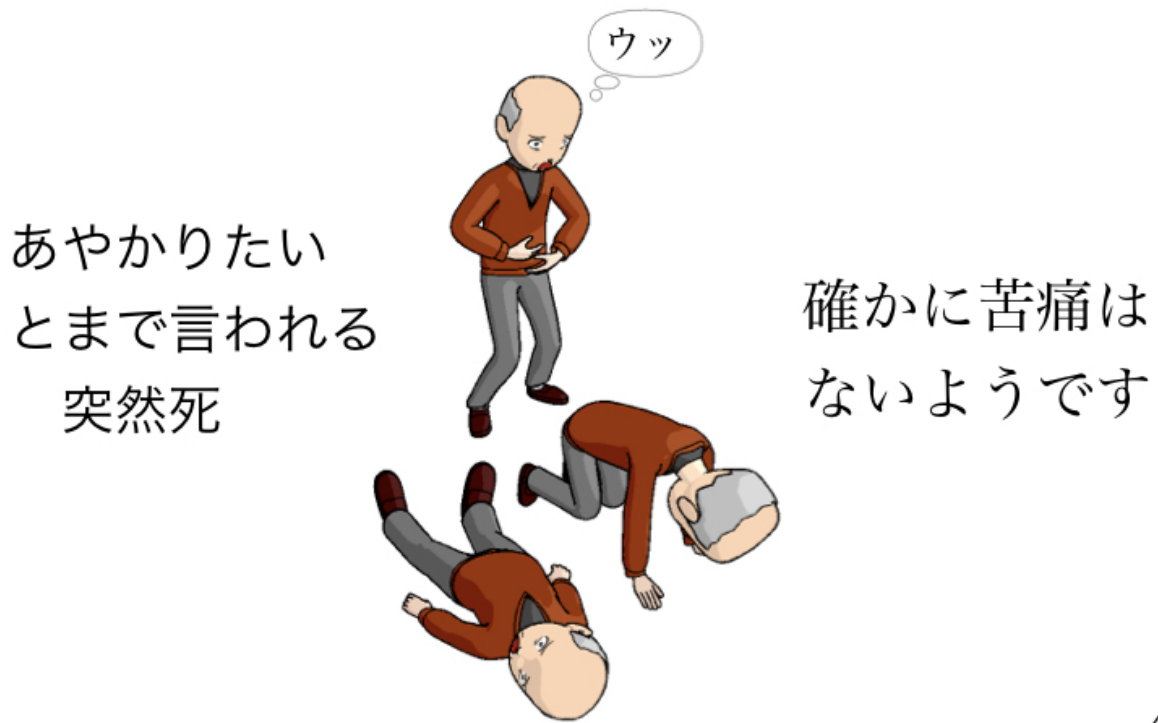
- 最期まで元気で （ピン）
- 介護も要らず （ピン）
- ポックリと最期を迎える （コロリ）

ピンピンコロリを具体的に考えましょう

「ピンピンコロリ」を調べてみると、実は厳格な定義はありません。

ピンピンコロリに託す思いは人それぞれだと思いますが、実際にどんなことを意味しているのか、確認してみましょう。

心臓突然死の実際



4

心臓発作で瞬間的に意識を失ってしまい、そのまま亡くなってしまう場合です。生還した人に聞いても全く苦しくなかったということなので、本当に苦痛はないようです。

家族に訪れる「突然の悲しみ」

出来る限りの医療
を受けても
助からない最期



これが前提条件



病院に搬送されて、救命処置をしても救命できなかったとき、本人は苦しまずに逝けるのですが、突然やってくる別れに家族は戸惑い心の傷となり残るのです。

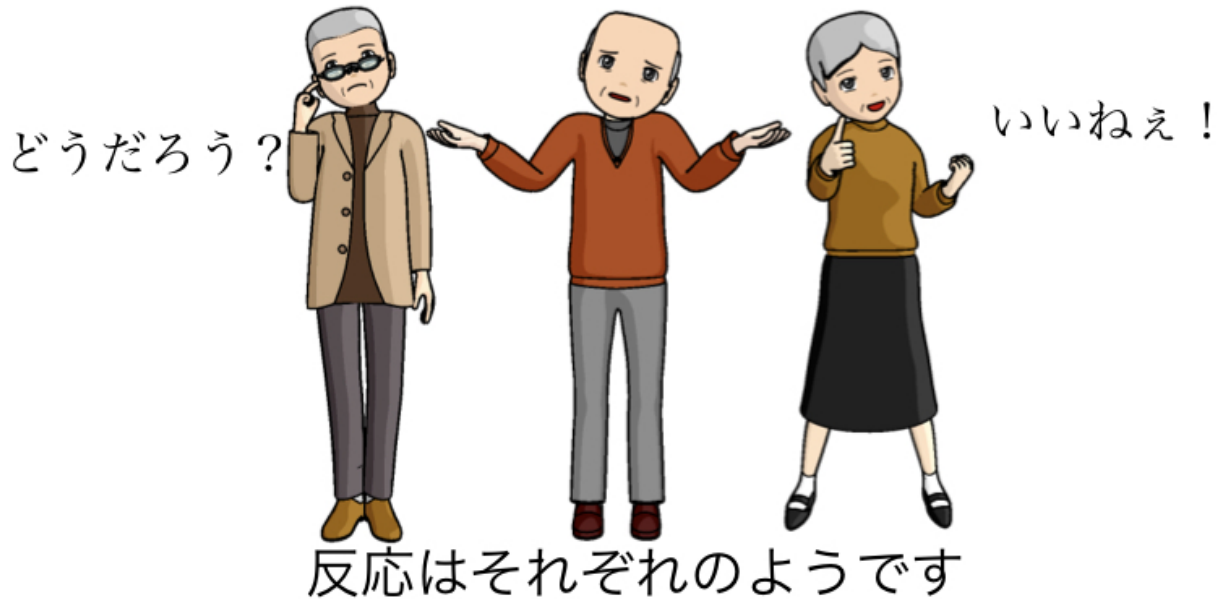
自宅なら、警察による検死



自宅で倒れているところを発見された場合は、警察官が来て検視が始まります。事件性がないか事情聴取が始まり、遺体は証拠物件として警察で保管されます。まるで殺人現場のように、痛ましい思い出が家族に残ります。

これが日本人の理想？

ダメでしょ？



あなたにとって理想の最期はどんな最期ですか？

7

この話をしても、「それで良い」と言う人もいれば、「こんなピンピンコロリ」はダメだと言う人もいます。

なんとなく「ピンピンコロリ」という言葉を使っていましたが、その意味が人によって違うのです。

ピンピンコロリを妨げるのは医療



病気をどうやって治すか？

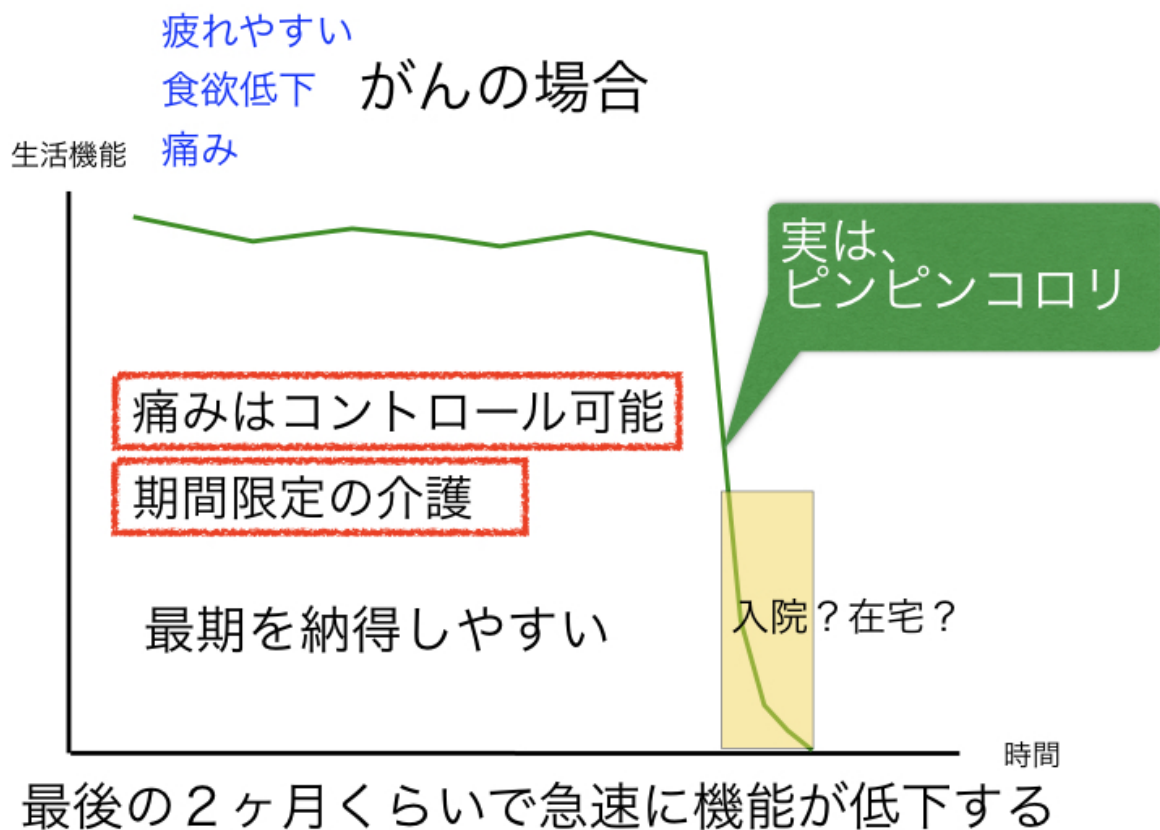


病気や障害をどう考えるのか？
本当にその治療が必要なのか？

病気によって経過も意味も違います

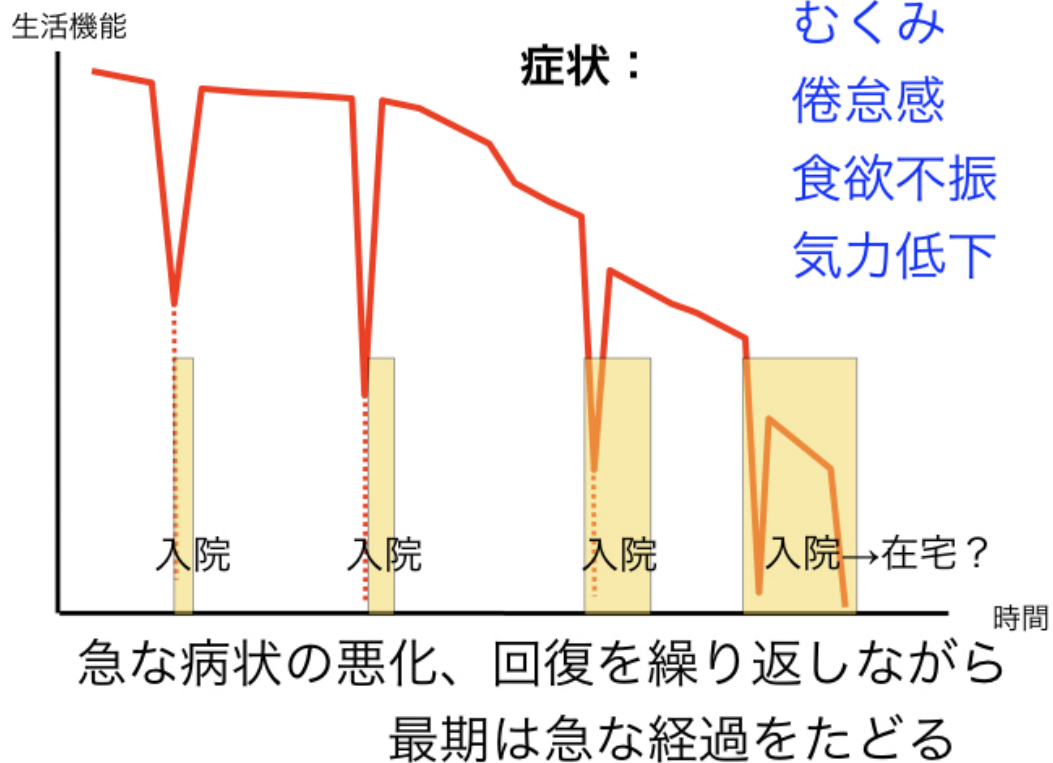
元気な時は、病院に行って治すことしか考えていませんでしたが、年をとるにつれて、後遺症や治らない病気と付き合うことが多くなります。

元気で長生きしたいのは誰でも同じですが、実は治療の選択によって、その後の生活のあり方を選択できるのです。



がんは痛いし苦しむと思っている人は少なくありません。しかし、実際はモルヒネなどで痛みはほとんど取れます。最期の1-2ヶ月で急速に体力がなくなるので、介護期間も限定しています。実はピンピンコロリと逝く一つの方法なのです。

肺、心臓疾患の場合

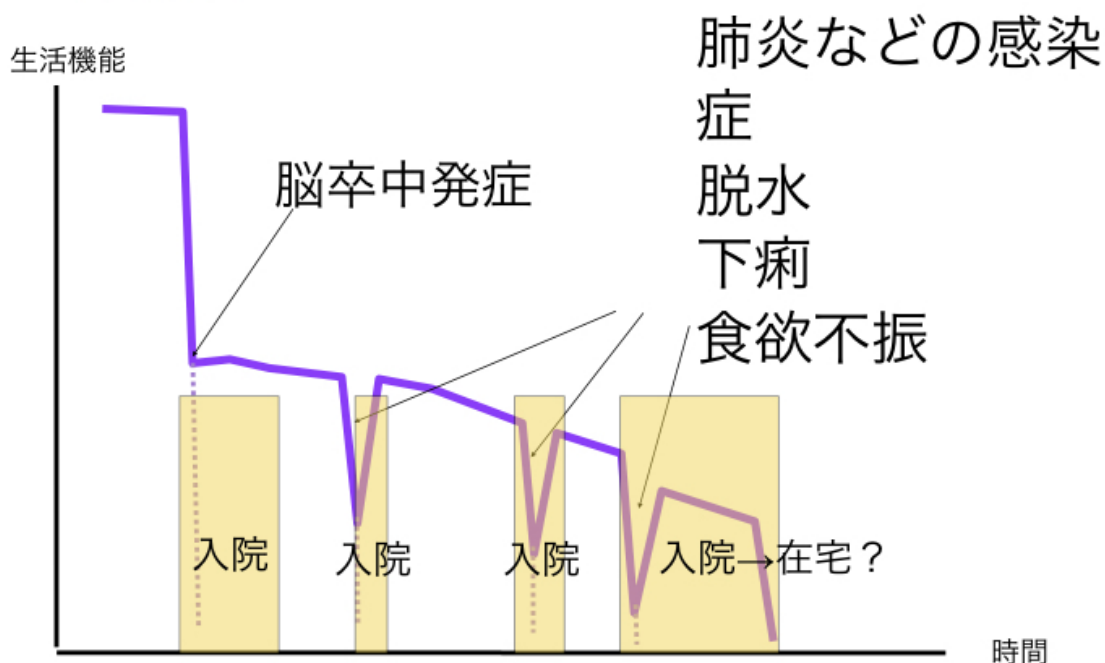


肺や心臓疾患の場合は、数ヶ月から数年かけて徐々に生活能力は低下して行きます。息切れや倦怠感、食欲不振、気力低下などです。さらに肺炎などで急に重症化して入院をしますが、最後まで回復する可能性が残っているので、気がつけば延命治療を行っていることになるのです。

手足の麻痺
嚥下困難
理解力低下

脳卒中の場合

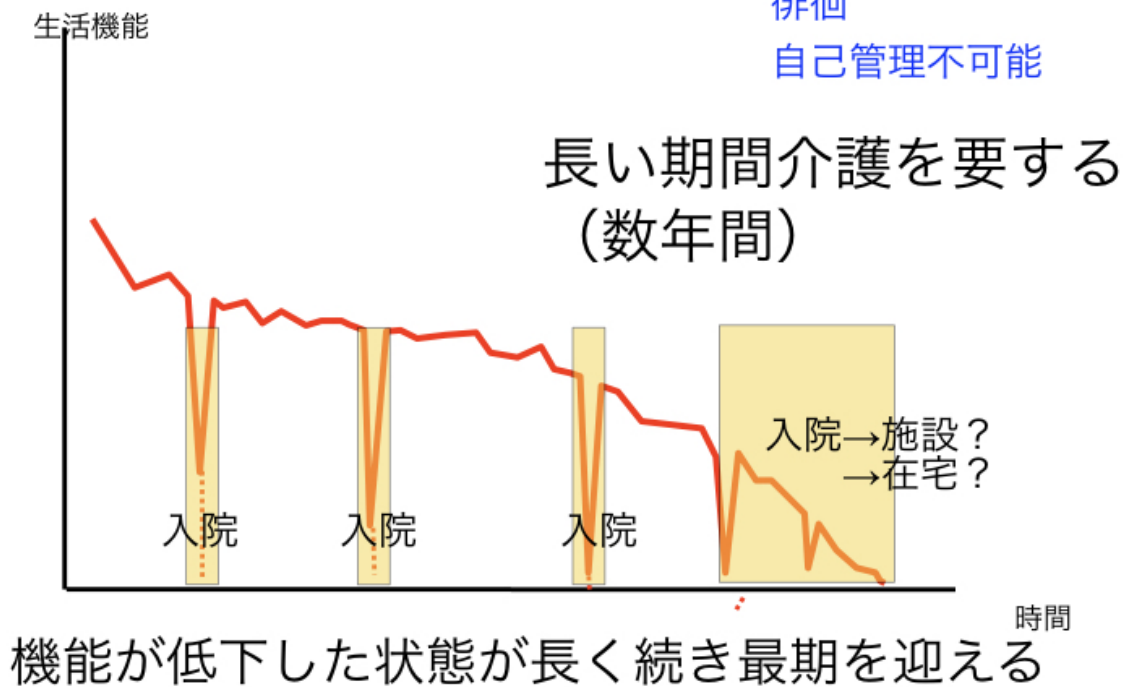
脳卒中の原因の3分の1は不整脈（心房細動）



脳卒中の場合は、麻痺などにより生活能力が一気に下がります。そしてその後も肺炎や骨折など入退院を繰り返します。入院までの期間は次第に短くなり、逆に入院期間は延びて行き、最期を迎えます。

認知症・老衰の場合

短期記憶障害
被害妄想
徘徊
自己管理不可能



老衰や認知症の場合は、更に長い期間をかけながら徐々に衰弱して行きます。体調を崩して入院しても、点滴を抜いたりしてしまうため手足を縛られながら治療を続け、治療の末に最期を迎えることになります。

非がん疾患の終末期 **特徴**

- 回復する可能性**が残っていることが多い
医学的な終末期と判断することが難しい
- 完全な終末期状態になったときは
本人が意思表示できないことがほとんど
- 家族に判断が委ねられるが、
突然、重大な責任を課せられ、判断できないことが多い

がん以外の病気は最期まで回復する可能性が残っている為に終末期だと判断するタイミング遅くなってしまう。そのときは既に本人は会話できないので、延命治療の是非は家族にゆだねられますが、その重責を負えずに辛い思いをしている家族がたくさんいるのです。

医者に任せておけば良いのか？



14

延命治療とよばれる処置をしないという重い決断をすることが家族にゆだねられて良いのでしょうか？

「素人だから解らない」と判断を医者任せではなく、少し考えて欲しいのです。自分の最期を考えることで家族が苦悩から解放されるのです。

医療拒否という選択肢



最近になって「医療拒否」という言葉を耳にするようになりました。良く本も売れているようですが、著者によって考えかたもずいぶん幅があるようです。

医療拒否という考え

胃ろう 拒否

人工呼吸器 拒否

抑制 拒否

点滴の拒否

本来必要とされる治療の拒否
について考えを深める必要がある

延命治療と呼ばれる処置のなかで次の4つを
考えて欲しいのです。胃ろう、人工呼吸機、抑
制、点滴についてです。

「人生の最終段階における医療の決定プロセス に関するガイドライン」（厚生省）

- 患者本人・家族などとの十分な話し合いの上で行う **本人家族の考えが反映される**
- 患者本人の個別状況に配慮して行う
- 可能な限り不快な症状を緩和する
- 治療中止以上に死期を早める処置は行わない。

→医療拒否は認められている

厚生省が発表した「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」というガイドラインがあります。治療方針決定に際して、一番大切なのは、本人の考えだとされており、こうした医療拒否は妥当だとされています。

注）終末期医療：できる限りの治療をしても助からない状態

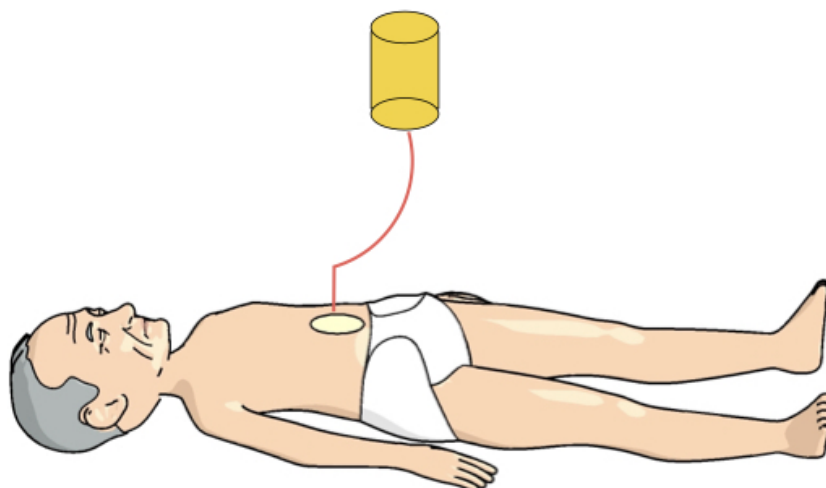
人生の最終段階：すぐに死んでしまう状況ではないが、近い将来亡くなることが予想される状態。

具体的な指示が必要です

「延命治療はしないで欲しい」という言葉
だけでは、何を指示しているのか医者に伝
わりません！

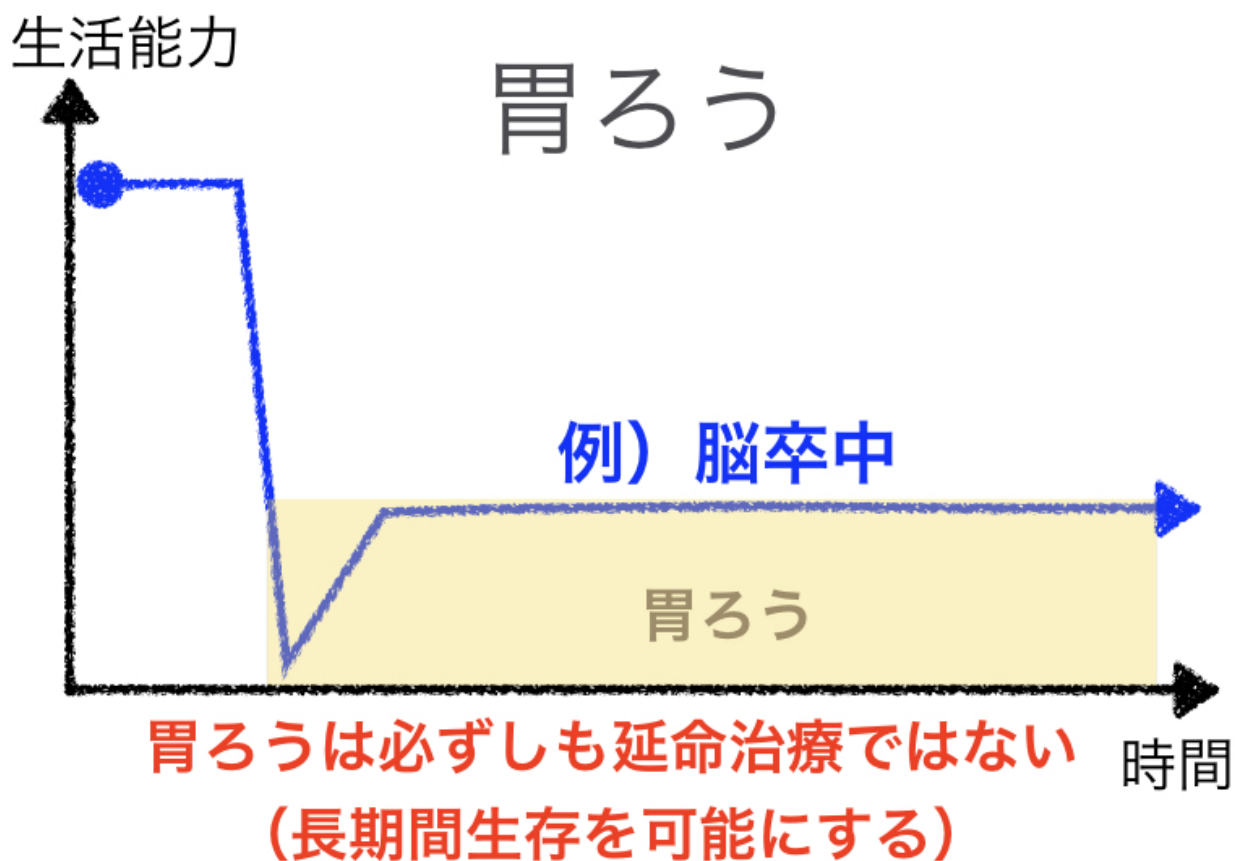
今までは、よく終末期という言葉を使ってきました。そうすると、できる限りの治療を受けても助からない状態を指してしまいます。そうではなくて、できる限りの治療を受けなくても良いとして作り出されたのが、「人生の最終段階」という言葉です。そして、自分が望まない治療を受けないようにするためには、あらかじめ自分の考えを家族に伝えておく必要があります。

胃ろう 意識がない、食べられないときに検討



必ずしも延命治療とはいえない

胃ろうとは、お腹の表面から胃に向けてチューブを通す処置のことです。このチューブから栄養剤を注入すれば口から食べられなくても栄養を摂ることができるのです。



20

胃ろうは延命治療なのでしょうか？

例えば脳卒中で口から食事を摂れなくなった人が胃ろう処置を受ければ、長期間生存することが可能になるのです。意思疎通も可能な場合も少なくありません。胃ろうは、必ずしも延命治療とは言えないのです。

終末期と言われる病気がない人が
「胃ろうをしないで欲しい」と
決定する意味

口から食べられなくなった時は
自分が最期を迎える時だと思っている

という意思表示をしたこと。

21

胃ろうなんて要らないと思うかもしれませんが、終末期状態にない人が胃ろうを断るということは、「口から食べられなくなった時は、自分が最期を迎える時だ」と意思表示したことになります。

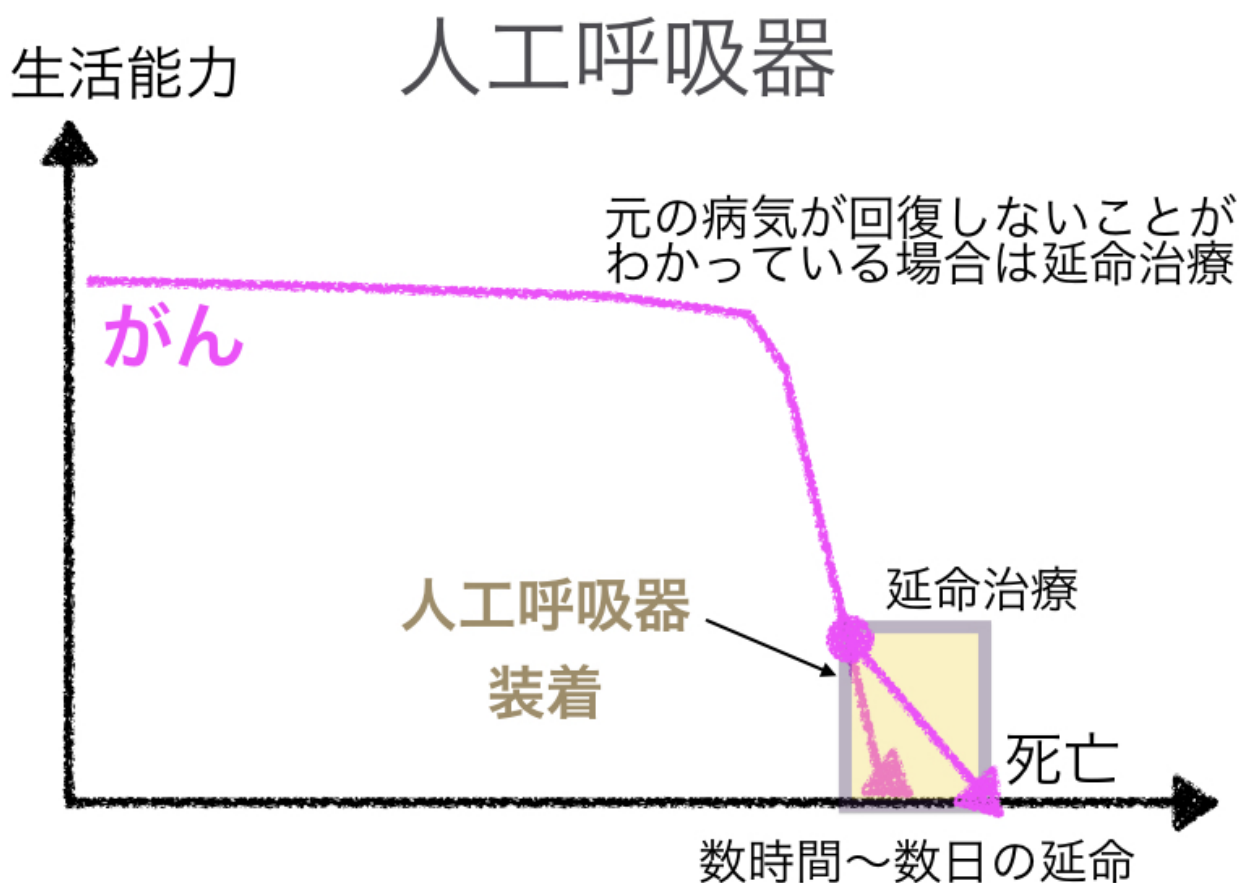
人工呼吸器 酸素吸入だけでは補えない呼吸障害に使用



必ずしも延命のための装置ではない

人工呼吸器は延命治療だと思っている人は少なくありません。しかし、人工呼吸器というものはそもそも救命治療のために用いられる処置なのです。

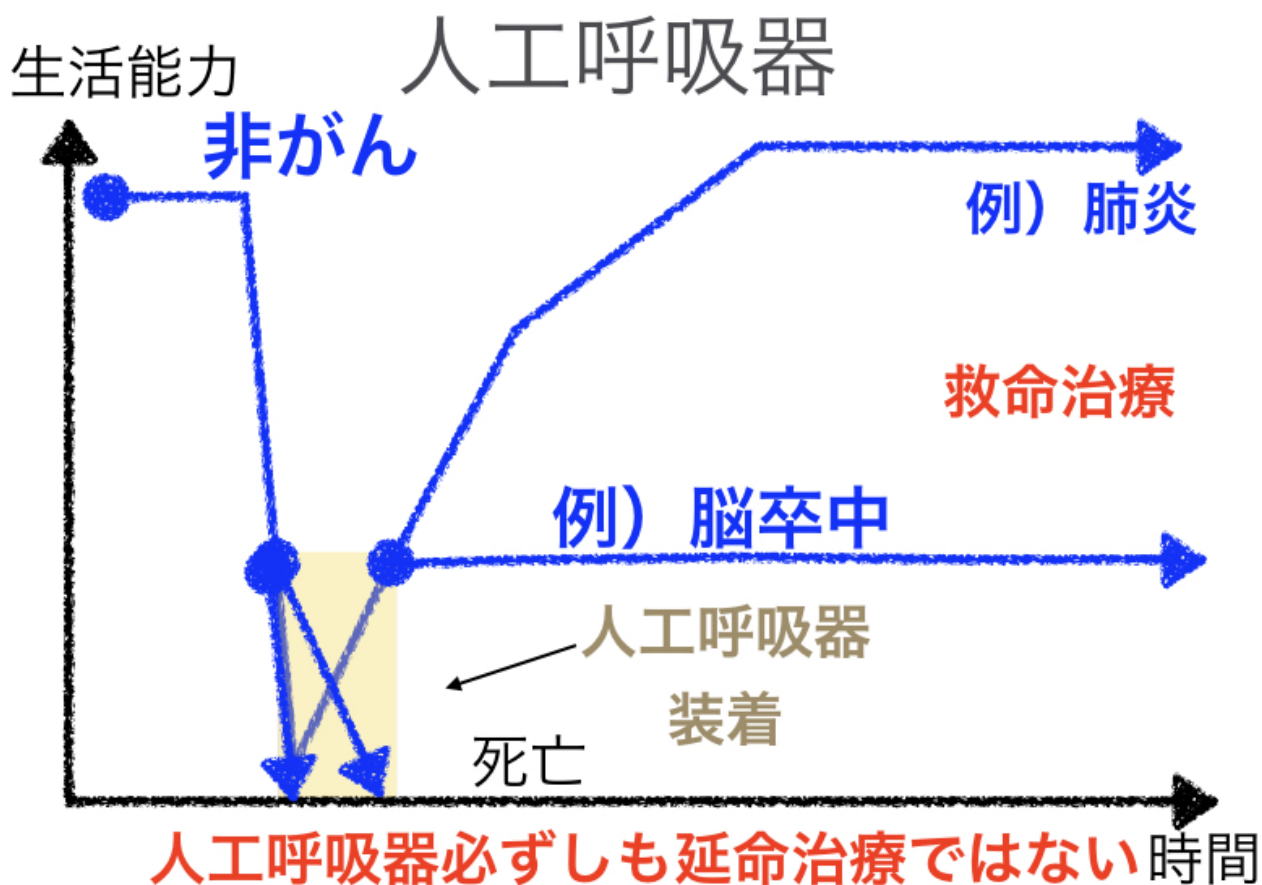
酸素マスクで酸素を吸っているだけでは不十分なときに機械の力を借りて呼吸をするのが人工呼吸器です。



23

がん治療の最後に人工呼吸器をつかって延命治療にしかないことは確かだと思います。

もともとの病気が良くなる訳ではないので、その効果も期待できません。この場合は確かに延命治療です。



24

けれども、非がん疾患の場合は、人工呼吸機を一時的に装着して見事に回復することが期待できるのです

ですから、延命治療は要らないと言っても人工呼吸機を使わないという意味にはならないのです。

終末期と言われる病気がない人が
人工呼吸器を装着しないで欲しいと
決定する意味

「助かる可能性が低くなっても構わない。
一時的であれ、機械につながれてまで生きる
必要はないと思っている」

という意思表示。

25

終末期状態にない人が人工呼吸機を使わない
で良いと言う場合は、

「助かる可能性が少なくなっても構わないから
一時的であれ機械につながれてまで生きる必要
はないと思う」と意思表示したことになります。

点滴

水分やエネルギーの補給、治療薬の投与で用いる

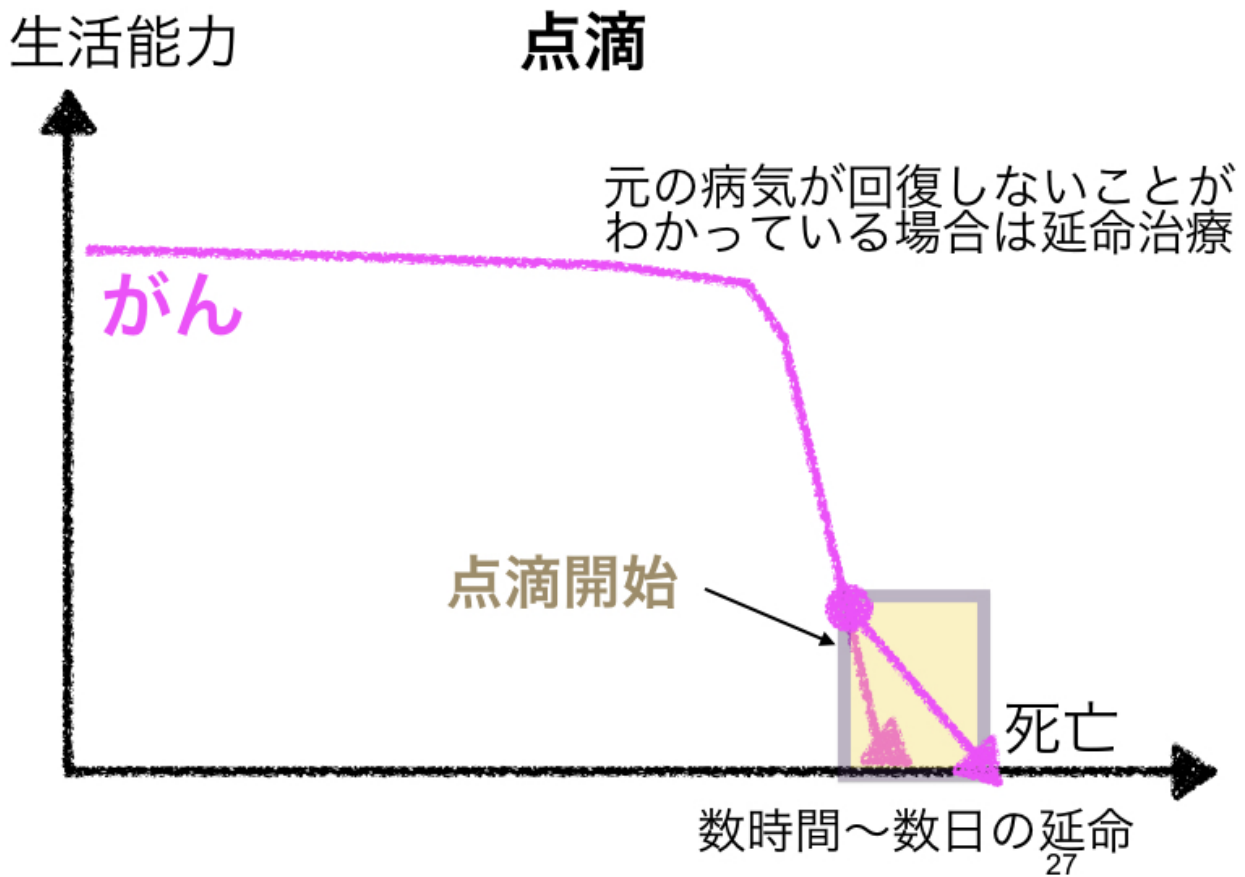


- 食事の代わりになるものから水分補給にしかないものまで様々な種類がある
- 高齢者は点滴を嫌がり抜いてしまうので**手足を縛られる**ことが多い
- 最期まで続けることが多い

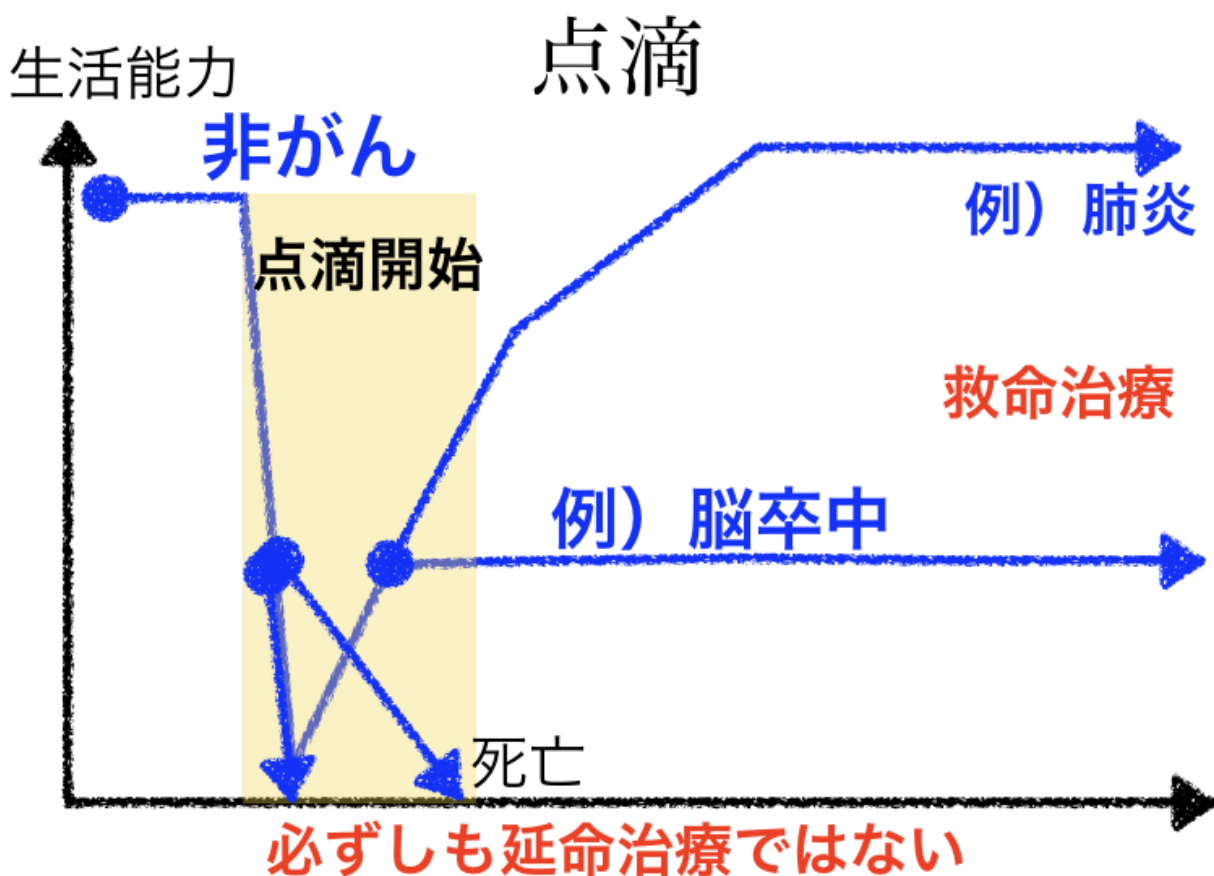
26

点滴で問題なのはもう助からないと解りながら点滴をやめることが難しいことです。

また、老人が入院すると混乱して点滴を抜いてしまうことがよくあります。そのため手足を縛りながら点滴をすることになってしまいますが、本当に必要な治療なのか考えさせられます。



がんの場合、がんが治ることを期待できない状況で単に水分補給をする意味で点滴することは延命治療になります。点滴もしないということに抵抗がある人が多いのですが、口からわずかにでも水分をとるだけで本人の苦痛が摂れることがほとんどです。



28

点滴は延命治療の対象とはなかなか考えられない場合がほとんどです。けれども、点滴をすることで失われることもあることを覚えておいて欲しいのです。

それは最期の言葉を交わすタイミングが計れなくなるということです。

点滴を続けながらの最期

最期の時が読めない
→ 家族の付き添い長期化
最期のときにいられない

家族はせめてもの治療
として点滴を希望？

- 手足を縛られながら点滴
- 孤独に迎える最期
- 機械的な最期



なぜか夜にひっそりと亡くなる事が多い

29

点滴を続けているといつ最期を迎えるのか判断が難しくなります。24時間家族が付きっ切りになることも難しく、独りで最期を迎えることになります。既に意識はなく、モニターの波形を見ながら、最期だと判断される。機械的な最期になってしまうのです。

終末期と言われる病気がない人が
点滴はしないで欲しいと
決定する意味

処置自体に必ずしも苦痛が伴う訳ではないのに
必要ないとあえて希望するとは、つまり・・・

もう寿命を延ばすための医療は要らない。
最期をむかえる準備ができています。

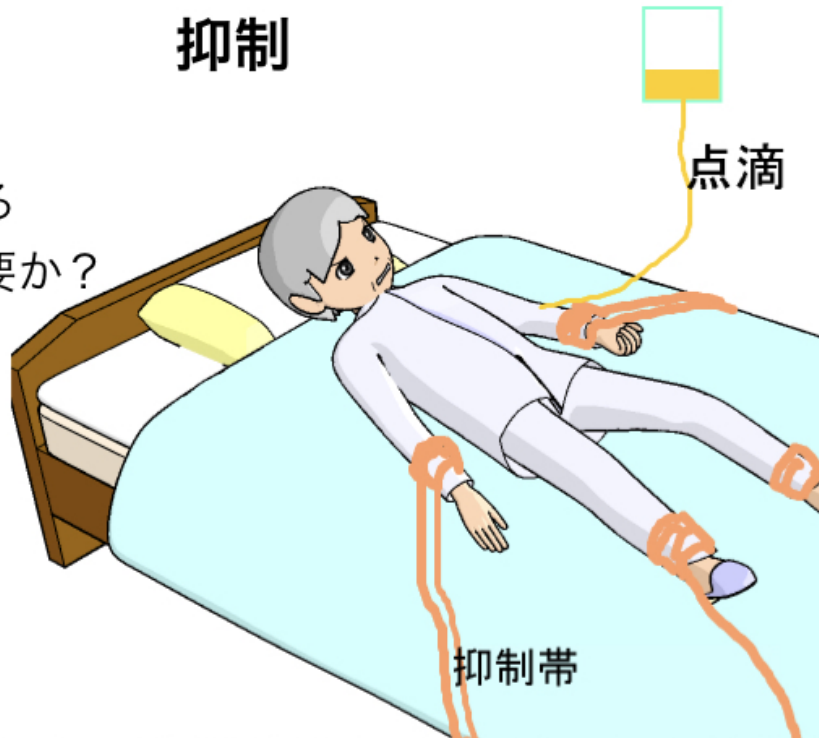
という意思表示。

30

点滴を一切しないという判断は、難しいと思います。でも、もう十分に生きて出来るだけ自然に逝きたいと思うならそれも有りだと思います。

抑制

手足を縛って
治療を受けさせる
精神的苦痛は必要か？



治療方法ではなく、治療するために用いられる処置

抑制とは手足を縛ることです。

病院では治療のために手足を縛ることが良くあります。代わりに家族が24時間付き添うことも無理なので日常化しているのです。

終末期と言われる病気がない人が
抑制はしないで欲しいと
決定する意味

病気の種類によらず、自分が嫌がることは
しないで欲しい。
それが原因で治療が出来ずに亡くなっても
構わない。

自分の命よりも自分のことを大切に
させてください。

という意思表示。

32

私たちは命のために生きているのでしょうか？命が大切なのは当たり前ですが、本人を無視して手足を縛りながら治療を続ける意義が見えないことが多々あります。本人の寿命よりも、本人の心を大切にする判断も間違いではないのです。

事前指示を書く必然性

- 人工的な処置で生かされるのは嫌だ
- 家族が悩まなくてすむため。
- 最期まで自分らしく生きたい

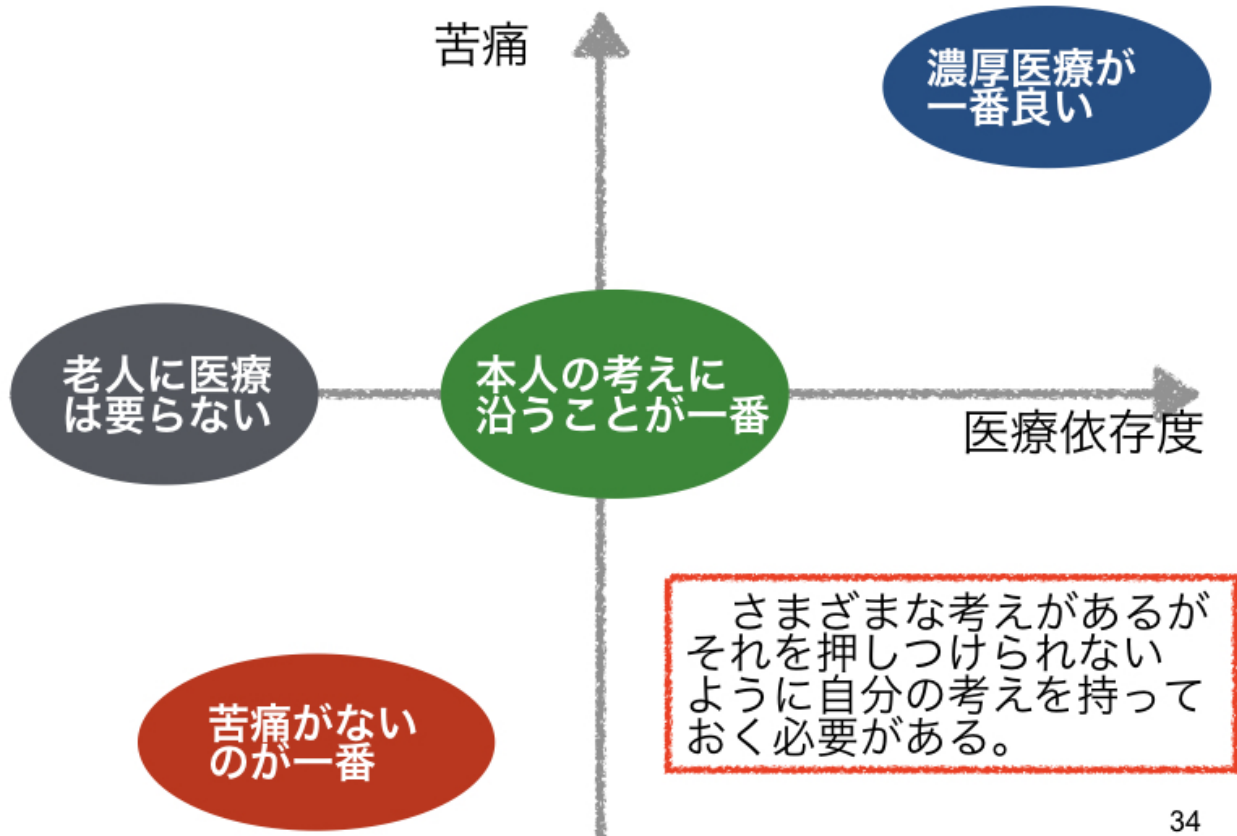
ピンピンコロリの実現のため

33

将来の医療処置について考えることは自分の最期を決めることです。自分らしくありたいという希望を実現するためであり、家族に重責を担わせることを回避するためでもあるのです。

がん以外でもピンピンコロリは実現できるのです。

老人医療に対するさまざまな信条



34

濃厚な医療が一番よいと考える人、苦痛がないのが一番と考える人、人それぞれです。誰かが間違っているわけではないけれど、大切なのは本人の意向に沿うことだと思います。担当医の意向ではなく、自分の考えを治療に反映させて欲しいと思います。

ピンピンコロリを実現するために しなければならないこと

- 1) 自分の理想の最期を描く
- 2) 家族に意向を伝え、了承してもらう
- 3) かかりつけ医にも了承してもらう

35

人生は理不尽なことばかりです。それに文句を言ってもはじまりません。せめて最期まで自分の考えを追及できることが一つの救いになるのだと思います。一生懸命に生きたということが本人、家族の慰めになるのです。